

IIAS「ゲーテの会」ブックレット
(VOL. 01086)

「新しい文明」の萌芽を探る
—日本と世界の歴史の転換点で、転軸機を動かした「先覚者」の事跡をたどる—

(科学・技術分野)

フロイトと並ぶ
深層心理学の開拓者「ユング」

公益財団法人国際高等研究所
<「新たな文明」の萌芽、探求を！>プロジェクト

本ブックレットは、2021年6月25日開催の第86回『満月の夜開くけいはんな哲学カフェ「ゲーテの会」』の講演録を基に、公益財団法人国際高等研究所<「新たな文明」の萌芽、探求を！>プロジェクト事務局が編集・制作したものである。

※本ブックレットの無断転載・転写を禁じます。ただし、個人としての利用の範囲内であれば、コピーしてご利用いただけます。

「新しい文明」の萌芽を探る

—日本と世界の歴史の転換点で、転軸機を動かした「先覚者」の事跡をたどる—

フロイトと並ぶ 深層心理学の開拓者「ユング」

心理学は自分自身の精神と直接関係するもっとも身近な学問でありながら、その成立は非常に遅れた。16、17世紀に由来する近代諸科学（物理学、解剖学、化学、生物学など）の誕生後、ようやく19世紀後半から20世紀になって登場する。心理学は人類には盲点となる難問で、そのために世間から誤解されることが多い。その成立にはフロイトやユングの功績が多大である。日本への紹介も遅れ、ようやく臨床心理士（1988/民間資格）や公認心理師（2018/国家資格）という＜新しい職種＞が生まれた。本会では2020年8月にまずフロイトが取り上げられた。

最初に心理学（実験心理学・臨床心理学）とは何か、他諸科学との視点や発想の本質的な違いを説明し、位置づける。そしてフロイトと対比しながらユングの果たした役割を解説する。ユングはフロイト以上に無意識の世界を重視した。ユングの「内向-外向」はすでに日常語となっているが、その真意は十分理解されてはいない。広範な分野に影響を与え続けているユングの業績紹介はまだ途上にあるといえる。

森谷 寛之 (Hiroyuki MORITANI)

京都文教大学名誉教授

1947年岡山県生、大阪で育つ。京都大学大学院工学研究科修士課程修了。同大学院教育学研究科博士課程でユング派分析家河合隼雄に学ぶ。工学修士、教育学博士、臨床心理士、公認心理師。愛知医科大学助教授、鳴門教育大学教授、京都文教大学名誉教授。現在、京都コラージュ療法研究所で心理相談活動。日本コラージュ療法学会理事長、元京都府臨床心理士会会長。教育心理学会城戸奨励賞、芸術療法学会賞。『コラージュ療法実践の手引き』、『臨床心理学への招待』（各単著）。『ユング心理学概説1』（共訳）など。



目次

はじめに

I 心理学とは

- (1) 実験心理学と臨床心理学
- (2) 心理学の特異性—二つの誕生
- (3) 科学史の中の心理学
- (4) フロイトの精神分析
 - (ア) シャルコーとフロイト
 - (イ) フロイトの自由連想法

II 「無意識」の発見

- (1) 「無意識」とは—諸科学との対比を通して
- (2) 「無意識」とは
- (3) 不登校と無意識
 - ① 無意識仮説と対話の構造
 - ② 心の構造モデル
- (4) フロイトの夢分析
- (5) ユングの夢分析

III ユングの生涯

- (1) ユングの生い立ち
- (2) ユング自伝
 - ① ユングの最初の夢
 - ② 自己治療と芸術療法
 - ③ ユングの夢と職業選択
 - ④ フロイトとの出会いと別れ
 - ⑤ 『赤の書』
 - ⑥ 塔の建設
 - ⑦ 晩年

IV ユングのタイプ論

- ① 心の羅針盤
- ② 晩餐会をめぐる8つのタイプ

質疑応答

<補足資料>

2021年6月25日開催

第86回 満月の夜開くけいはんな哲学カフェ「ゲーテの会」

テーマ：フロイトと並ぶ深層心理学の開拓者「ユング」

講演者：森谷 寛之（京都文教大学名誉教授）

（文中敬称略）

はじめに

本日のテーマはユングだが、前提として、心理学そのものがどのように皆さんに理解されているかが懸念されるので、まずは心理学全体について説明させていただく。

最初に「心理学とは何か」ということ、次にフロイトが精神分析を打ち立てた歴史とその科学史上の立場を解説する。その後、フロイトとの関係を含めてユングの生涯を紹介する。ユングはフロイトと切り離して語るができない。そこから、ユングの中で最もよく知られているタイプ論を紹介したい。

Ⅰ 心理学とは

（1）実験心理学と臨床心理学

まず、心理学がいつどのように始まったのか、その由来から説明したい。

近代科学は、16世紀、17世紀のガリレオ、ニュートンの物理学から始まった。そして同じ頃、近代医学に発展する解剖学が始まっている。しかし、見えない微小な世界を探求する化学の発展は遅く、ようやく18世紀後半に錬金術から近代化学に発展する。もともと別のものと考えられていた物理と化学は19世紀に「物理化学」として一体化して大発展し、20世紀に相対性理論や量子論が登場し現代に至る。そして、19世紀には生物学の革命があり、ダーウィンの進化論が登場する。その結果、それまで人間だけは神の似姿で特別の地位にあると考えられていたのに、サルと同じ動物のひとつという立場になった。天動説から地動説への見方の転換と同じように、進化論によって人間の尊厳が傷つけられたのである。これらの後により心理学が登場する。すなわち、心理学はこれらの諸科学の成果を基盤にして成立できたと言えるだろう。これらを念頭に置いていただきたい。

また不思議なことに、心理学には二つの立場が存在する。一つは19世紀半ばに生まれ、心の客観的測定をめざす心理学で、当初はフェヒナーの「精神物理学」と呼ばれていた。現在は「実験心理学」と呼ばれている。もう一つは、精神物理学から半世紀ほど遅れて、19世紀末にノイローゼの治療をめざすフロイトの「精神分析」が生まれた。「分析」という言葉が示すように、物理学よりも化学に親和性がある。そして1900年にフロイトの『夢判断』という画期的な本が登場する。つまり、心を物理学的に客観的に測定しようという立場と、化学のように心の悩みをなんとか分析し、心をよい方向に変容させようという立場、この二つの性質の異なる二つ心理学が出てきたわけであり、前者を実験心理学と呼び、後者を臨床

心理学と呼んでいる。

そういう意味では、20世紀にようやく今の心理学の骨格が成立したといえる。しかし、性質の異なる二つの心理学は、まるで水と油のように交わることが困難であった。その後の発展の道筋も違うために、この事情を知らない世間では「心理学」とは、どちらの心理学を指しているか誤解されることが多い。心理学を学ぶために大学に入ったら、自分の考えていた心理学ではなかった、ということがよくあった。

「心理学」と言うと、世間では性格や悩み相談の学問と考えるが、それは精神分析の流れを受けた「臨床心理学」を指している。しかし、アカデミズムの大学ではそれは怪しげな学問で、「科学的な心理学」とは違うと考えられていた。そのために臨床心理学は大学ではなかなか受け入れられて来なかった。私が京都大学工学部に入った1960年代は、ほぼすべて実験心理学系であった。これが変わったのは、後にも話すように河合隼雄が1972年に助教授に就任してからである。それ以来、最近は臨床心理学に勢いがあり、少し事情が変わってきている。それでも受験をするときに「心理学部」と「臨床心理学部」の違いがいったい何を意味しているのかを理解することはむずかしいのではないだろうか。受験生は今でも悩んでいると思う。

(2) 心理学の特異性一二つの誕生

「精神物理学」は、元ライプチヒ大学物理学教授のフェヒナーが、1850年にうつ状態から回復したときに「物理世界のニュートンの引力の法則に匹敵する、精神世界の基礎となす一般原則を発見した」と確信したことから始まっている。その後、1879年に、ヴント（医師・生理学者）がライプチヒ大学に心理学実験室を作り、ここから心理学が普及するようになった。それから間もない1888年、元良勇次郎が東京大学に精神物理学を導入した。非常に素早い導入といえるだろう。以後、これが各大学へ広がった。大学人が心理学と呼ぶとき、この心理学の流れを指している。

ところが一方、フロイトやユングの著書は1920年代頃から翻訳されていたが、実体はなかなか日本に入って来なかった。1932-33年に医師の古澤平作がフロイトのもとに短期間留学し日本でも精神分析療法を始めていたが、古澤は大学人ではなく一般には知られない状態であった。また、「精神分析療法」を担当するのはいったい誰か？という問題もあった。心理療法とは医療行為なのか、そうではないのか。つまり医師に限るべきか、医師でなくてもよいのか。これは資格問題の際にいつもぶつかる壁であった。

本格的に入って来たのは、諸説あるが、1965年が一番相応しいと私は考えている。それは当時天理大学教授で非医師である河合隼雄が日本で最初のユング派分析家の資格を得て、スイスより帰国した年である。そのときから、夢の分析が日本で本格的に始まる。また、箱庭療法という子どもから大人まで気軽にできる方法も紹介され、心理療法の考え方が急速に発展する。1972年に国立大学である京都大学教育学部助教授に就任したことも普及にはずみを与えた。これはフロイトもユングも大学人ではなかったことを考えると非常に大き

な意味を持っている。私が最初に河合先生にお会いしたのは、京都大学での最初の講義日であった。

この二つの心理学の成り立ちと発展がなぜ違うのかというと、精神物理学は知識と技術を学ぶとすぐに利用できる。しかし、フロイトやユングの心理学の方は単に知識の習得ではなく、自分自身の人格訓練が必須条件である。そのために河合は自分自身が患者の立場になって4年半の間、夢分析を受けてきた。これは教育分析と呼ばれる独特の訓練法である。

精神物理学では物質の器具が心の測定装置となり、測定者自身の人格が問われない。(個人的な測定誤差はある。)しかし、精神分析は分析家自身が心の測定装置の役割を担うので、分析家自身の人格が測定に影響する、というその違いが少し理解できるかと思う。ユングも「分析心理学は基本的に自然科学である。しかし、それは他のどのような科学よりも、観察者の個人的な先入見に影響される」(『ユング自伝2』p.3)と述べている。そして、この二つの心理学の専門家の養成システムも異なるものであった。そのために、心理の資格制度はかなり揉めたものの、2015年に「公認心理師法」が制定され国家資格となった。歴史上存在しなかった新しい職種の誕生といえる。河合の帰国から50年後である。新しい職種の専門性が他の職種とどう違うのかは、説明するのにかなり苦勞する。

(3) 科学史の中の心理学

フロイトやユングの心理学とはどういう学問なのか、それを理解していただくために、他と比較することで説明してみたい。

1609年、ガリレオが望遠鏡で月を直接観察し(図1)、それまで月は鏡のようだと教えられていたことが間違っていたことに気づくようになった。ここから近代科学が始まったと言われている。近代科学とは、自分の目で直接観察し、見たことを正確に記録し、その記録に数学を適用し一つの法則を見出していくやり方である。その結果、長年思い込んでいた考え方の天動説から地動説へと180度も変化する。これはコペルニクスの転回と呼ばれ、それまでは自分中心に世界が動いていると考えていたが、その自己中心的世界観が大きく変わることになった。進化論の登場も人間中心の世界観が間違いであることを示した。

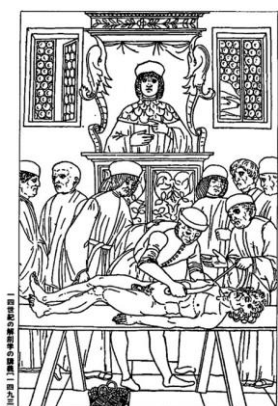
医学の世界では14世紀頃から人体解剖が始まった。それまでどの世界でも解剖はタブーだったが、ペストの大流行も影響したのであろう。とうとう人体解剖を始めることになった。1306年、イタリア人のモンディーノが最初といわれる。この頃は、解剖を行っても、その解剖図をきちんと残すことができなかった。人体解剖は「見たくない」ものだった。人間の内臓を細部まで冷静にしっかりと見ることも自体がとてもむずかしい。その心構えができるまでには相当の時間を要した。



(図1) 望遠鏡で観測し記録するガリレオ／サジェット, M. (大橋一利訳) 1992『ガリレオと近代科学の誕生-原図で見る科学の天才』玉川大学出版部 (Martin Sugget 1981 Galileo and the Birth of Modern Science. Wayland Publishers Ltd.)

1493年の解剖学講義の絵(図2a)がその頃の様子を表しているが、これを見ると、壇上に権威ある医師が古代ローマ時代のガレノスの原書を読みあげる。解剖体に自分は手で触れることをしない。その代わりに小使がその例証として人体を開き臓物を取り上げている。その周りに医学生たちがいるが誰もそれを見ていない。たとえ、ガレノスの記述と内臓が違っていても、ガレノスの方が間違いなどとは決して思わない。

最初の解剖学書であるヴェサリウスによる『人体の構造について』が出たのは16世紀半ば(1543年)であり、1306年の最初の解剖から250年ほど経って、やっと今に通じる解剖学書が出てきたことになる。



(図2a)「中世の解剖学講義」
(1940年頃)／坂井建雄『人体観の歴史』(2008)／岩波書店



(図2b)『トゥルプ博士の解剖学講義』
(1632)／レンブラント／Public domain,
via Wikimedia Commons

ここで二つの図を比較する。図2aはヴェサリウス以前の中世、図2bはヴェサリウス以後のレンブラントの有名な絵「トゥルプ博士の解剖学講義」(1632)。比較すると分かるように、後者では医師自身が人体に手の届く位置に立ち、その周りの医学生が取り囲んで食い入るようにそれを見ている。内臓をしっかりと観察できる能力が備わっていることが分かる。人体を物体と同じ客観的対象として、すなわち「モノ」として見るようになったことも示している。

現在、医学は内科と外科の二つの分野から成り立っている。医学「medicine」は内科医を意味し、外科医は医師の仲間には入れられなかった。外科は「surgery」で原義は「手の仕事」である。当時は「医者床屋」とか「床屋医者」と呼ばれ、床屋(理髪師)がメスを持ち外科的な役割を果たしていた。「図2a」の人体に直接触れている低い身分の人が後に外科医に成長する。医学は内科と外科の2段階の誕生後に大きく発達し今日に至る。

(4) フロイトの精神分析

① シャルコーとフロイト

さて、ようやく心理学にたどり着く。フロイトはもともと医師で神経学研究者としてウナギの解剖などの研究をしていた。精神分析を作り出すきっかけを示す絵がある(図3a)。

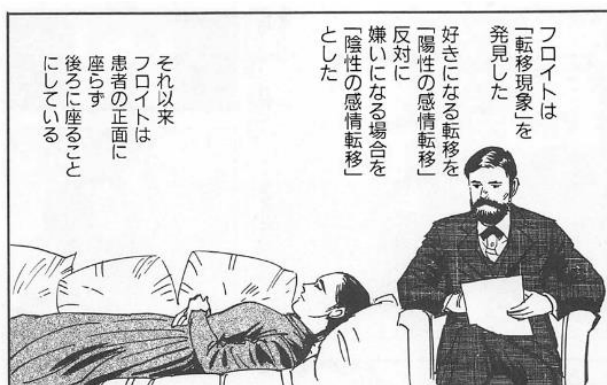
フロイトは1885年～1886年までの約半年間、フランスの医師シャルコーの下に留学した。その頃、シャルコーは催眠術を使ってヒステリーの研究をしていた。図3aは当時のその講義風景である。シャルコーは堂々と皆の中心にいて、その横ではヒステリー患者が意識を失っている。多くの医学生たちは驚嘆し、凝視している。暗示(命令)、つまり心理的操

作によってヒステリー症状を作ることができることをみんなに見せた。

フロイトはそれを見て感心し、ウィーンに帰国後、自らも催眠術を使ってヒステリーの治療を試みる。そして自分なりに工夫して、それで出来上がったのが精神分析である。1896年に「精神分析」と命名している。帰国して10年後である。



(図 3b)左：ジークムント・フロイト(1856-1939)/ Public domain, / 右：フロイトの面接室・ソファ、ROBERT HUFFSTUTTER, CC BY 2.0 共に via Wikimedia Commons



(図 3c) フロイトの精神分析療法場面(19世紀末)『フロイトの「心の神秘」入門』/福島章監修・石田おさむ絵 1999 講談社

患者を催眠状態に眠らせる代わりに、覚醒状態のままの患者から話を「聞き出す、引き出す」という方法に変えた。覚醒状態のままの患者は寝椅子に横になりリラックスして心の内を話す。フロイトは患者が十分に話をするまで辛抱強く待ち、聞く。これを1回ではなく何回も継続する。ガリレオが月を観測し記録したように、フロイトも手にペンを持って記録していることに注目。すなわち、フロイトはガリレオの科学的方法に従っている。精神分析は非科学的と批判されることが多いが、科学であろうと努力していることは理解してほしい。

これが精神分析療法の基本で、現代の心理相談全体の基本となったということができよう。現在ではしばしば「傾聴が大事」という言葉が使われるようになっている。これはもともとフロイトに由来すると言える。この方法は人類がかつてしてこなかった画期的な方法で、私は科学史における画期的なパラダイム・シフトだと考える。しかし、皆さんはこれが画期的な方法といわれてもピンとこないと思う。「人の話を聞くことが大事」は言われなく



(図 3a)「シャルコーの臨床講義図」(19世紀後半)/アンドレ・ブレイエ Ellenbergr,H.F. 1970

シャルコーの講義風景(図 3a)とフロイトの精神分析室の風景(図 3b)とを対照してみたい。ただし人物のいない室内風景だけでは、その意味が分からないので、アニメの力を借りて説明したい(図 3c)。患者は寝椅子(カウチ)に横になり、フロイトはその傍で話を聞いている。フロイトは何をどう変えたのか。シャルコーとフロイトを比較すると見えてくるものがある。

シャルコーは催眠で人為的にヒステリー症状を「作った」。しかし、フロイトは症状を「治そう」、すなわち、「消そう」とした。方向は180度違う。作ることができるのであれば、消すこともできるはず。そのためにフロイトはく

でも自分はすでに知っていて、すでに実践していると考えているはず。では、何がそれまでと比べて画期的だったのか。

大先生のシャルコーは患者に向かって語りかける、というよりも命令する。医師ならこれが当たり前。フロイトの場合は反対に話すのは患者で、聞くのがフロイトである。ここに医師と患者の関係を逆転させた。そういう意味で精神世界におけるコペルニクス的転回と言える。

それまでは、医師は患者のこまごまとした訴えをきちんと真面目に聞くということがなかった。今でもこの状態はあまり変化がない。たとえば、学校では生徒は大勢いる職員室の片隅で短時間だけ相談する。図 3a では患者は大勢の目にさらされている。これをフロイトは心の秘密を守れる個室に変えた（図 3c）。学校では 1995 年の「スクールカウンセラー制度」が始まる前まで「個室」はなかった。また、話すのも何もかも億劫なうつ状態の人の話を辛抱強く聞く気になるだろうか。しゃべりたい人に話を聞くのではない。しゃべりたくない人にも傾聴するには、それが重要だという強い信念がなければできない。フロイトはその信念を見つけた。「本当に辛抱強く、とことん聞く」といったいどういうことになるか。

ユングは寝椅子を使わず対面で行うが、基本的な考え方はフロイトと変わらない。子どもには寝椅子の方法は使えないなど、適用範囲が制限されるからである。フロイト派の人たちは今も伝統を守り、寝椅子を使い続けているようだが、それはそれで意味あることだと思う。

② フロイトの自由連想法

フロイトの方法では、患者は心に思い浮かんだことを正直にすべて話す。そのためには医師と患者の信頼関係が重要となる。そして、医師は患者の話に耳を傾けて、可能な限りそのすべてを記録する（フロイトは面接場面では筆記しなかったと言われている）。ここで大事なことは、フロイトは自分自身の心の中に生じたことも“同等の重み”で重要と考えたことである。相手の言動を記録するだけでなく、そのときに自分の心の中に生じたことも自然現象として観測の対象になる。そのために自身の心の中を正確に認識し、記録する。つまり、患者のことを観察すると同時に、自分の心も観察しなければならない。

これが、たとえば「聞き取り調査」とまったく違うことはお分かりだと思う。聞き取り調査は、相手の語る事実だけに関心を向ける方法であるが、フロイトの場合、患者と医師の双方の心が対象になる。かつて人類が経験してこなかった非常に複雑で困難な試みと言える。

この寝椅子が「心が心を支え合う」そして同時に心が心の仕組みを「探求する」デザインである。心の治療方法であり、同時に心の研究方法である。現在の臨床心理士や公認心理師の相談活動の根本はこのデザインにあると言える。

II 「無意識」の発見

(1) 「無意識」とは一諸科学との対比を通して

フロイトのデザインを物理学や解剖学など他分野と比較対照すると、フロイトの独創性

がより深く分かるだろう。

たとえば、ガリレオは望遠鏡を通して月に向けて観察し（図 1）、それを記録し、そこから理論を打ち立てた。フロイトはガリレオの科学的方法に従っている。すなわち、患者の様子や言葉を細かく観察し、すべて記録し、ここから心の仕組みを理論化した。

このとき注意が必要なのが、「現実」というときに、「物理的現実」と「心的現実」の二つを区別したという点である。ガリレオは「物理的現実」を、フロイト、とりわけユングは「心的現実」を前提にして、それを科学的に探求しようとした。しかし、ガリレオは月を細かく観察したが、人間の心の中を観察しようとはしなかった。まして、自分の心の中をも観察することが科学として必須であるとは考え及ばなかった。フロイトやユングの心理学は、内外の両方の現実を対象にしている。外的対象の月の観察から「心の中の現実」を発見する方向に 180 度も転回するのに、300 年ほどの時間を費やした。

近代医学（図 2b）の解剖と比較すると、フロイトの精神分析は「心の解剖」に相当すると言える。フロイトの支えによって、患者が自ら自分の心を開いていく。

近代医学は人体を物体（モノ）と見立て、医師がメスを入れていく。しかし、精神分析の対象は生きて活動している人間で、自ら意思を持っている。この場合メスに相当するものは言葉である。自ら勇気を持って自分の心を開いていく。言葉のコミュニケーションによって心を少しずつ開いていくわけだが、開き過ぎないように配慮も必要で慎重に進めていく。

絵を見ると、トゥルブ博士(医師)は博識で滔々と語り、まわりの医学生たちはその知識に聞き入っている。語るのは博士の方で、医学生が聞く側。それらに比べ、(患者の傍らに座る)フロイトの態度はいかにも頼りなく見える（図 3c 本文 p.9 に掲載）。フロイトは患者がどうしたら治るのか何も知らない、患者自身の方が治す方法を知っている。そのためにフロイトは患者から何もかも教えてもらわなければならない。

「カウンセリングを受けに行くと、先生は黙って聞くだけでどうしたら治るのか何もアドヴァイスしてくれなかった」と抗議するクライアントがいる。語るのはクライアントであって、カウンセラーは聞き役である。世間の常識とは反対なので、この理屈がなかなか理解されない。ただし、十分に話が聞けたら、その後はアドヴァイスすることができる。しかし、そのアドヴァイスの情報源はクライアント自身の心の中にあつたものである。そのために多くの場合、クライアントは自分で徐々に分かるようになってくる。精神分析は自己洞察を促す方法とも言える。医師が患者を分析してそれを告知しても、患者が心底それを受け入れなければ意味がない。世間でいう馬耳東風である。

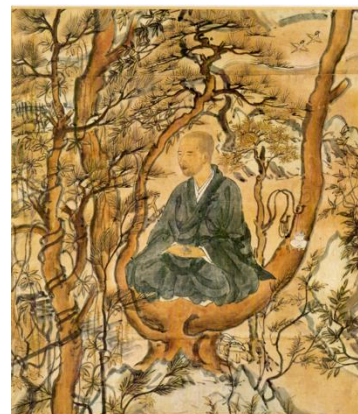
傾聴の結果、フロイトは患者からいろいろ教わった。教わったことをフロイトはまとめて考察し、多数の著作として実らせた。

精神分析療法は医師のフロイトが生みだした。そのため、この方法は医学に属するのかわかが大きな課題になった。ユングも医師である。精神分析療法を担うのはいったい誰か？心理師の国家資格にあたりこれが大きな議論になった。心理療法は「医療行為かどうか」。これについてフロイト自身は非常に明確な判断を下している。

「精神分析学は医学の専門分野ではない。私には、人がなぜこのことを認めたがらないのか分からない。精神分析学は一箇の心理学である。」(『素人による精神分析の問題』のため
のあとがき 1927) と断言している。「心の解剖」とか「心理療法」とかは医学ではなく単
に比喩である。まったく新しい科学分野であり、新しい職種であるために、それを表現する
ための最適な術語がない状態である。そのために「精神分析医、精神分析家、カウンセリング
、カウンセラー、臨床心理士、公認心理師」など世間を混乱させる事態になっている。私
がここで講演する場合でも一貫した言葉を使えないでいる。将来的には国家資格である「公
認心理師」に集約するはずである。

教育との比較でいうならば、孔子は「子、曰く」で目上の立場の先生が語り、目下の立場
の生徒が聞く。生徒は先生から知識をいろいろ教わる。それが伝統的な教育方法であるが、
フロイトはそれを「患者、曰く」に逆転させた。

さらに、東洋の瞑想(図4)と比較してみよう。瞑想も心
の内面を見つめる素晴らしい方法である。瞑想を始めると
心にいろいろな「雑念」が湧いてくる。しかし、東洋の瞑想
法では心の中に湧いてくる雑念には一切かかわらず、「無」
に集中しようとする。他方、フロイトはこれまで誰も顧みな
かったこの「雑念こそ無意識の現れ」として重視し、それを
正確に取り出し分析しようとする。自分自身の中にあるこ
の雑念を取り出す作業は一人ではできない。誰かの助けが
必要である。明恵上人は木の上でひとりしずかに瞑想にふ
ける。しかし、患者はフロイトの助けがなければ雑念を取り
出すこと、すなわち自分の心の探究ができない。心の探究を
援助する役割こそが分析家で、今日の新しい職種となる。これが国家資格の源と言える。



(図4) 瞑想「明恵上人樹上坐禅像」
恵日房成忍と推定される Public
domain, via Wikimedia Commons

最近では東洋の瞑想に対しても社会的な関心が寄せられ、それは「マインドフルネス」と呼
ばれている。かなり昔 1920 年には「森田療法」と呼ばれる方法が日本で生まれている。こ
れはフロイトの影響を受けていない。気になることがあっても「とらわれないで、あるがま
ま」の状態で行動するのが方針であった。

「心の現実」ということで考えると、宗教は早くから気づいていたといえよう。しかし、
それを科学と結びつけるという発想をもたなかった。

(2) 「無意識」とは

ニュートン物理学は運動の 3 法則と万有引力の法則を基本にする。この基本からすべて
導かれる。これに対してフロイトにはたった一つしかない。それが「無意識」で、この概念
からいろいろ説明できる。この一番大事な「無意識仮説」を理解してほしい。私は大学で学
生に臨床心理学を教えていたが、学生に「無意識とは」ということについて納得させること
はなかなかできなかった。私以外の多くの先生も同じで、そのためにまともに教えるのを避

けていると思う。「無意識」を使わなくても何とかなるものである。たとえば、心の「内界」など別の言葉で暗示するだけで間に合う。むしろ「無意識」を使わない方がよく理解されるのも不思議なことではある。

「無意識」は臨床心理学以外の分野では使用されない概念である。たとえば、前回、鶴見太郎先生が昔話の世界の話をしたが、昔話の世界と臨床心理学の違いは、「無意識仮説」があるか、ないかといえるだろう。鶴見先生は一度だけ「無意識」という言葉が使われたが、そういう使い方とは違う。

フロイトは『精神分析入門』の序論中で「無意識的な心的過程が存在するという仮定を立てることによって世界の学問にとってまったく新しい方向づけが可能となったと断言する」と述べている。なぜ、この仮定によって学問世界にまったく新しい方向づけができるのか、それが分かりにくいと思う。

無意識とは「知っているけれど、知らない」という奇妙な仮説である。これは論理矛盾で、学問的に成り立たないと批判されるのも当然のことと思う。

日常生活では単に「気がつかない」という意味で使っているが、もっと積極的な意味がある。患者は「自分の悩みを治す方法を実は知っているが、自分が知っていることを知らない」という意味である。すなわち「無意識に知っている」。これを発見したのは催眠の研究からだった。催眠状態でインタビューをすると、患者は自分の病気の由来もその治し方も滔々と語り、「自分はいつになったら治る」と予言したりすることもある。ところが、催眠から覚めた途端にそれを忘れてしまう。これは非常に不思議な現象だが、そういう経験からフロイトは「無意識」の仮説を立てた。

患者は自分の悩みを治す方法を知っているのであるから、その方法を本人から聞き出すことができる。それがフロイトの寝椅子のデザインと言える。

(3) 不登校と無意識

無意識を理解してもらうために、身近な問題で、誰にでも起こりそうな現象である不登校の例を挙げて説明したいと思う。不登校という現象において、「無意識」はどのような形で使われているかを紹介する。

まず一般的に不登校とはどういう現象か。朝、子どもが「身体の調子が悪い」と言って学校に行かなくなる。そこで、医師の診察を受けるが、どこも悪くないし、昼になると元気になっている。そのため、親は「子どもは学校がいやで、怠けている」とか「嘘をついている」と考える。それで子どもを叱り、無理に外に連れ出そうとするが、子どもは頑として家を出ようとしない。夜には翌日の時間割に合わせて用意をする等、学校に行く素振りを見せる。

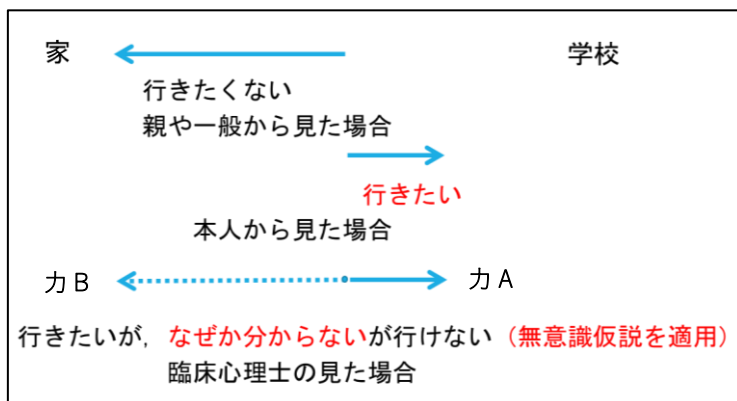
しかし、朝になると行かない。それで、親はまた「騙された」と思い、激しい親子喧嘩になる。その挙句、困った親は我々心理師(士)のところ子どもを連れて来る。

では、心理師(士)はこれをどう考えるのか。心理師(士)が子どもに話を聞くと「学校へ行きたい」と言う。「では、どうして行かないのか」と聞くと、それ以上は何も話すことがで

きない。

このような事態を切り開くためには新しい考え方が必要になる。

右は数学のベクトルを利用した私のオリジナルの図（図5）で、右側に「学校」、左側に「家」を置いている。親から見ると、子どもは学校に行っていないので、子どもは学校に行きたくないと判断する。その子どもの心の動きは「学校ではなく家」の方に向く矢印で表現できる。



（図5）不登校の心の動き — 意識と無意識の相互作用
（森谷 2000、2005／本文 p.37 <参考文献> 参照）

ところが、子ども本人は「学校に行きたい」という。この子どもの心の動きを表現する矢印は「学校」の方に向ける。ただし、「行きたい」という言葉は弱々しいので、「学校」に向く矢印の大きさは小さい、すなわち短く表現する。この二つの図から、親と子は互いに見ているところが違い、理解できない状態で、互いにこれ以上どうしようもないことが分かる。昔、幾何学の問題で、解けないときに補助線が見つかるのと難題が一気に解けた経験があると思うが、同様にここにも何か補助線が必要になる。

それに対して、心理師(士)は、子どもの「学校に行きたい」(力 A) という気持ちを嘘ではなく本心と受け取る。すなわち子どもの味方である。一方、学校に行っていない現状を見ると、親の言い分もまちがいはない、正しい面がある、と心理師(士)は親に対しても理解し味方になる。つまり、心理師(士)は対立している子どもと親の双方の味方になることになる。

ただし、心理師(士)は親と子の味方の“程度”(量)を変えている。すなわち、親の言い分は半分しか認めない。実線であるはずのところを点線の矢印で表すように変える(力 B)。この点線は親からは見えても、子ども本人にとって見えない力=無意識の力を意味している。親からは見える(実線)が、子どもからは見えない力(点線)として表現する。

すなわち、「意識」と「無意識」という言葉を使って表現すると、子どもは意識としては「学校に行きたい」と考えているが、なぜか(無意識)学校に行けないということになり、無意識の力(力 B)が学校に向かわせない状態に作り上げる。このように、フロイトのいう無意識を補助線として仮定すると不登校現象が説明できるようになる。

この基本的なモデルのおかげで、次に援助のやり方を考えられるようになる。子どもには「行きたいという心の動き(意識 力 A)」と「行きたくない心の動き(無意識 力 B)」の二つの心の動きがある。「意識」を力 A とすると、これは見える力なので、これに対しては励ましたり、助言したり、説得したりすることで、より大きくすることができる。子どもに対して「学校に行った方が将来のためになる」などいろいろ話をする。それで子どもが納得

すればよいが、たいていは納得しない。そうなると、お手上げ状態になる。

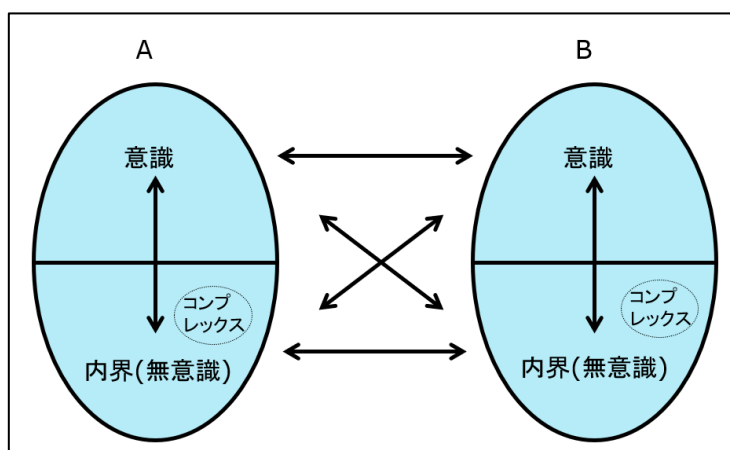
そこで心理師(士)は意識だけではなく、見えない力 B(無意識)に対して何とか対処しなければならない。この見えない力にどう向き合うのか、それこそが心理専門家の役割である。

では、どうするのか。まず、フロイトが行っていたように、「学校になぜ行かないのか、学校に対して何か思い当たることがあるか」など、いろいろなことを尋ねる。しかし、たいていはなかなか話をしてくれないものである。隠しているわけではない。なぜなら、それは無意識であるから、自分でも分からない。心理師(士)はそれでも根気よく聞いたり、「箱庭を作って見ないか」と言ったり、「夢でもみないか」とか訊ねる。箱庭作りや夢が不登校と何の関係があるのかと世間では不思議に思うだろう。それは見えない力(無意識)を何とか見えるようにする努力である。このようにして心理師(士)は意識と無意識の両方を想定しながら対応していることをお分かりいただきたい。ここまでの話で、「無意識」について少し分かっていたただけだろうか。

① 無意識仮説と対話の構造

「無意識」という前提を認めていただければ、次のモデル

(図6)も認めていただけるはずと考える。無意識は誰にもある。A(患者)とB(フロイト)の二人が互に向き合い、B(フロイト)がA(患者)に対して「あなたの心の中に生じていることを何でも話してほしい」と言う。すると、Aは自分の心の中(無意識)から思いついた



(図6) 無意識仮説と対人コミュニケーション・モデル
(森谷 2018/本文 p.37<参考文献>参照)

ことをフロイトに伝える。つまり患者は自分の「意識↔内界(無意識)」と交流し、それをB(フロイト)に伝える。B(フロイト)はそれについてさらに何か質問する。そして患者はまた心の中を観察していく。

注意したいのは、それは「取り調べ」とか「聞き取り調査」とは根本的に違うということである。患者が自分の体験、たとえばいじめられたとか、悔しかった等の体験を話すと、それに対してフロイト自身もいじめられたり、悔しい思いをしたり、類似したことを思い出したり想像しながら、相手の言うことを「共感的に理解する」。すなわち、患者が自分の内面と対話しているとき、フロイト自身も自分の内面と向き合っている。先に分析家自身の人格が測定道具であると述べたことはこういう意味である。患者との相互性、共感性がなければ、治療関係は成立しない。このモデルはそういう二人の複雑な相互関係を表現している。

この「無意識」を前提にすると、非常に複雑なコミュニケーションのあり方を取り扱うこ

とができるようになる。「意識」と「意識」のコミュニケーションとは、日常の業務連絡とか情報交換のようなものをいう。これは事実だけの単純なやり取りになる。通常、社会でいうコミュニケーションが大事というのはこのレベルのことを指している。

A の意識→B の無意識は、B には気づかないことを A は気づいている。その逆もそう。つまり互いに自分の気づかないことは他人から気づく。フロイトが患者を一方向的に観察するだけではなく、患者からも見られている。無意識と無意識のコミュニケーションは互いに気づかない盲点である。この盲点は第三者から指摘されないと分からない。このために外部の指導的立場にいる人から、二人のコミュニケーションについてコメントをもらう。

このように、たった一つの無意識仮説によって非常に複雑なコミュニケーションの在り方を表現できるようになることを理解してほしい。

② 心の構造モデル

近代医学の解剖学の考え方が心理学にも影響を与えている。フロイト自身医師であったし、精神分析を生み出す前はウナギの解剖学的研究に従事していた。人間の体内に内臓があるのと同じように、心にも内臓があるのではないかと発想するのは当然であろう。こうしてできたのが「心の構造モデル」で「心的装置」とも呼ばれている (図 7)。

このモデルについて今回は詳しくは説明しないが、今から 100 年前にフロイトが考案した有名なモデルである。それまで誰もこういう形で「心」を表現しようとした人はいなかった。そもそも「心」は広がりを持たないで、空間的に展開し表現することができない。フロイトはそれを敢えて空間的に展開した。「心の構造モデル」を作ると、それを基にノイローゼや精神病の違いなどをいろいろ演繹したりすることが可能になる。

100 年前にできたモデルなので古くなったが、これより良いものはまだない。このモデルを修正しようとしたのがユングである。ユングはフロイトの無意識は“個人的”無意識で、その背後にはより広大な人類共通の“普遍的(集会的)”無意識があるという考え方を提出している。

私はなかなかよく考えられたすばらしいモデルであると思う。しかし、多くの人にとっては自分と何の関係があるのだろうかと思惑するしかないだろうと思う。心理学の理論、とりわ

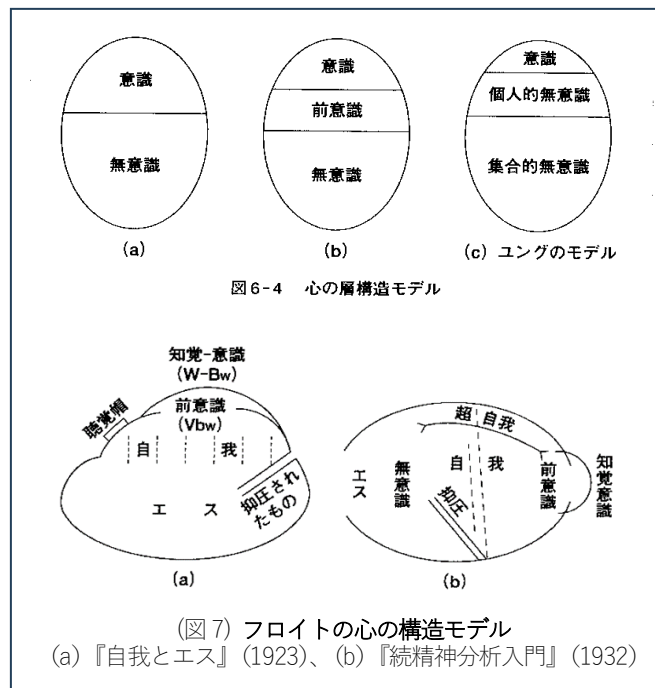


図 6-4 心の層構造モデル

(図 7) フロイトの心の構造モデル
(a) 『自我とエス』(1923)、(b) 『続精神分析入門』(1932)

(森谷 2018 / 本文 p.37 <参考文献> 参照)

け臨床心理学の場合、すべて自分のこととして当てはめて考えることが大事で、これが物理学などとの大きな違いである。

(4) フロイトの夢分析

どうしても分かってほしいのが夢の分析である。実は、ユングの理論はすべて夢の現象から考察している。したがって、夢のことが分からなければユングの理論はなかなか分からない。まず夢とはどういうものか、どう扱っているのかということについて話したい。

きっかけは、やはりフロイトである。フロイトは1900年に『夢判断』という本を出したが、それは「ブロイアーの患者が症状の代わりに夢の話をした。そこで夢にも意味があるのではないか」と考えたのがきっかけである。たとえば、先ほどの不登校の例で言うと、子どもが、本当は学校の悩みを話すはずなのに、その文脈の中で突然関係のない夢の話をはじめとする。それに対して「夢の話も大事ではないか。これは不登校と関係があるはず」とフロイトは考え、夢の研究をするようになったというわけである。この着想もすばらしいと思う。普通なら無視し見逃している。

夢は誰でも見る。しかし、はっきり覚えていないし、いい加減なことがある。しかし、そういういい加減なもの、根拠がはっきりしないこと、忘れていることも含めて夢と見なす、とフロイトは仮定し出発している。

また、夢は身体的現象ではなく、心的な現象で、夢は「夢見ている人の作品で、自己表現だ」と仮定する。私たちが小説を書いたり、絵を描いたりするのは自己表現であり、自分の作品である。したがって、説明を求められたら、内容を説明できる。しかし、夢は説明できない。それでも、夢は自分から生まれたものであるから、自分に関係があることは事実である。それを「作品とみなす」という発想はなかなか生まれえない。

そこで、フロイトは「夢を見た人自身は夢が何を意味しているのかを知っている。ただ自分が夢の意味を知っているということを知らない。自分は夢の意味を知らないと信じているだけ」という大胆な仮説を立てる。「知っていることを知らない」のは「無意識」を指している。つまり、無意識を前提にすると夢分析を始めることができる。

夢分析は、夢主に「あなたはどのようにしてそんな夢を見たのか」と聞くことである。夢主は「なぜか分からないが、疲れていたのだろうか」とか「最近、こういうことがあったから」と何とか説明する。それが夢の意味だと分かる。

昔から夢は重要であったが、昔の夢「占い」とフロイトの夢「分析」は根本的に違う。古代の夢占いは「夢占い師は夢の意味を知っているが、夢主自身はそれを知らない」という考え方であった。それに対してフロイトは、「私（フロイト）にはあなたの夢の意味が分からないので、説明してほしい」と夢を見た本人に説明してもらおう。そうすると、本人が徐々に説明できるようになる。それが夢解釈になる。

夢占いとフロイトの違いは「無意識」仮説を持っているかどうかである。世間の人には「無意識仮説」を理解していないので、今でも夢分析と夢占いの違いが分からないでいる。

(5) ユングの夢分析

ユングはフロイト以上に夢分析を大事にした。理論の中心に夢分析がある。私も心理師(士)としての一番の基本は夢分析と考えており、実際に夢分析は非常に役立つと考えている。

しかし、ユングはフロイトのように夢の考察を体系的にしなかった。

ユングの夢分析の基礎は、「夢は一つの事実としてあり、それはとにかく何か意味を持っているらしいということ以外に、何も前提を持つてはならない。」「夢は無意識の一つの固有な表現である」ということで、「これ以上謙虚な原理の提出の仕方は考えられない」「ともかく研究に値するものである」として、ここから出発しようとした。

そして、ユングは「これと関連してどんなことがあなたに起こりましたか」「それはどんなことを意味していますか、それはどこから生じてきたのですか、それについてあなたはどうか考えますか」などの質問をする。この部分ではフロイトとユングはあまり変わらない。

本日、皆さんも夢分析のことを学ばれた。夢を見たら「なぜこんな夢を見たのか」「なぜこの人物が登場したのか、この人物は自分にとってどういう意味があるのか」というように自分であれこれと考えてみてください。また、子どもが「こういう夢を見た」と言ったら「分からない」と言うのではなく、まず「どんな夢を見たのか」と真剣に聞いてあげてほしい。「楽しいのか、苦しいのか」などでも分かれば子どもの心の状態が分かるはず。すなわち、子どもは夢を持ち出し、「自分は楽しいのだ」、とか「苦しいからそれを分かってほしい」と親に訴えたいと考えてよい。夢の中に人物が出てきたとしたら「それはどういう子なのか」「何をしたのか」など、本当に真剣に聞いていく。そうすると大事なことが分かる。家庭でも少し夢を扱えるようになると思う。それで自分の手に負えなくなったら専門家に相談してほしい。多くの場合、夢についての話を聞くだけでも十分に役に立てると思う。

しかし、子どもが少し大人になると、夢を話してくれないようになる。また、そこからの連想を聞いてみても子どもが嫌がることになる。

III ユングの生涯

(1) ユングの生い立ち

さてようやく今日のテーマ、ユングにたどり着いた。「夢」とユングは一体である。

ユングの著書『人間と象徴』の扉に、ユングの肖像が載っている(図8)。堂々として恰幅のいい人だったことが分かる。フロイトよりも大柄で、並んで写真に写るとき、フロイトに遠慮して腰をかがめていたというエピソードもある。

ユングは、1875年にスイスに生まれる。フロイトは1856年に生まれているので、フロイトの方がユングより20歳近く年齢が上である。父親に相当するくらいの年齢差で、実際にフロイトは



(図8) ユングの肖像/C.G. ユング著 河合隼雄監訳『人間と象徴』(1975)河出書房新社

ユングを自分の後継者にしようと考え、ユングのことを「皇太子」と呼んでいた。しかし、ユングは後継者にされることは喜ばなかったようで、後にフロイトと喧嘩別れをしてしまう。

おもしろいエピソードがあって、ユングの名はカール・グスタフ・ユングというが、実は祖父と同姓同名である。この祖父はゲーテの私生児という噂があり、真偽のほどは分からないが、ユング自身もこのエピソードを半ば楽しんでいた。

ユングの父は牧師だったが、ユングとは宗教観で大きな対立があった。母は特異な霊的洞察力を有する人だったらしく、そのような二人の間にユングは生まれている。

(2) ユング自伝

ユングを知るには『自伝』を読んでほしい。この自伝は大変ユニークで、小さいときから見た夢を土台に書かれている。このような自伝を書いたのはユングだけだと思う。フロイトも『夢判断』で自分の夢をいくつか出している。夢分析の最初はフロイト自身の見た「イルマの夢」といわれる有名な夢で、これを自己分析している。ユングの自伝を初めて読んだときはとても不思議で「何だろうか」と思うが、何度か読み進めるうちに段々と分かってくる。夢であるからどのように読んでもよい。また自伝とは別に、フロイトやユングの日常生活の隅々まで調べて書かれた伝記が数多く出ており、小説を読むよりおもしろい。物理学者の伝記と読み比べて見ると、精神分析家の視点はまったく違うことが分かる。

ユングは『自伝』のはじめに「私の一生は、無意識の自己実現の物語である。無意識の中にあるものはすべて、外界に向かって現れることを欲しており、人格もまた、その無意識的状况から発達し、自らを全体として体験することを望んでいる」と書いており、この短い文章の中に「無意識」という言葉を3回も使っている。これもユングの特長といえる。

ユングの自己イメージとしては「(私は)いつも地下茎によって生きている植物のような」存在と言っている。ユングの肖像を見ると地下に生きてきた人間のような印象は持たれないと思う。若いときは地下茎のように生きていた人が段々とエネルギーを貯え、地上に出て社会的に認められ、堂々たる人格を持つに至った、そういう一生の物語である。その変化の様子がすべて夢やヴィジョンによって表現されている。

① ユングの最初の夢

ユングの最初の夢は、3、4歳頃のもので非常に印象的である。「地下室に降りていくと緑のカーテンの中に部屋があった。その部屋には黄金の玉座があり、その上に高さ約4メートル、太さ約50センチの巨大なファルスが立っていた。『あれが人喰いですよ』という母の声が聞こえ、恐怖で目が覚めた」という内容。実際はもう少し長い夢である。

これが最初の夢であり、ユングの人生を貫くモチーフである。地下の世界に大事なもの、大変なエネルギーを持つものがあり、それはユングには恐怖として感じられた。そのエネルギーは上に向けられているのが分かるであろう。人生が進むにつれてそのエネルギーは

徐々に表に出るようになる。つまり、最初の夢にもう一生のことが示されている。夢の重大さが、このエピソードからも分かると思う。

② 自己治療と芸術療法

学童期、小学校のときに友だちに突き倒されて頭を打ち、意識を失いそうになった瞬間に「もう学校に行かなくてもよい」と思いつき、学校を休み始め、半年くらい休むことになる。いじめで不登校のはしりといえよう。

休んでいる間、ユングは自分で治療を始める。戦争の絵や、襲撃されて焼き払われた古城の絵を描いたが、これは芸術療法の起源である。戦争や襲撃されて焼き払われた古城はいじめられた体験とも重なっている。

このようなことをしながら自分で治していくわけだが、「自分はこのときに神経症とは何かが分かった」と言っている。不登校になって、自分で治して、神経症の原理を理解したというのだから、大変な能力だと思う。フロイトとは無関係にすでに自己治療法を持っていたとも言える。

③ ユングの夢と職業選択

ユングの夢はたくさんあるが、その一つに職業選択に関する夢がある。

皆さんは、職業選択をするときに何かを根拠にしている。最近ではキャリア教育が盛んになって、将来の職業選択に関しては「本当は何をしたいのか」という質問をしながら考える。我々の時代は理科系か文化系か、教科の成績だけで決めるといような乱暴な考え方だったが、職業選択はもっと繊細なものである。

その走りがユングである。「自分は将来何になるのか」と考えているときに、彼は二つの夢を見る。一つは「暗い森の中の墓地のある丘を掘り始める。先史時代の動物の骨を掘り当て、興味を持つ」という夢で、もう一つは「森の中に水路があり、その一番暗いところに藪に囲まれた丸い池がある。その中に奇妙な不思議な生き物が横たわっている。それは直径3フィートの巨大な放散虫だった。言い尽くせない不思議を感じる。知識に対する強い欲望を感じ、目を覚ます」という夢だった。

「これが職業選択とどうつながるか？」と普通は考えるだろう。こう考えてみると少し分かると思う。こういう夢を見る人がサッカー選手や歌手になるだろうか。あるいはセールスマン、弁護士、裁判官になるだろうか。それはあり得ないだろう。もし、その道に進んでも、不適応になるだろう。

ユングは最初の夢と同じように地上よりも地下の世界、水面下の世界に関心がある。世俗社会から遠く離れて、多くの人からは関心を持たれないような暗い森の中の墓地、池の中の世界である。普通の人には関心を向けられないような世界。しかし、そこにはとても知的に魅力的な世界がある。このような夢を見る人が選択するとすれば、精神科医はかなり有望な選択肢となるだろう。医師でも社会から脚光を浴びる先端分野ではなく、たいいていは人目につかな

い郊外にある病院の方に気持ちが向いているはず。そしてそこで患者の心の奥深く掘り下げていく。底深く探求したことによって知識欲が満たされ、その業績によってはじめて陽の目を見る立場に立つ。古い過去の世界の探求は、後に普遍的無意識の世界を発見していくことをすでに暗示しているといえよう。

したがって、「将来、自分は何になるか」と考えるときに、夢を手掛かりに話し合うことは意味がある。新入社員が職場不適應になって心理相談するとき、私は実際そのようにしている。夢の中ではどんな仕事をしているのか。それを聞くと、いかに多くの人が自分の適性を考えないで職業選択をしていることかと思わされる。

④ フロイトとの出会いと別れ

ユングの学者としての研究の出発点は言語連想の研究とオカルト現象であり、いとこの14歳の少女の霊媒を観察し、学位論文にしている。

そして、フロイトの『夢判断』を読んで大いに関心を持ち、フロイトと親しくなって一緒に精神分析運動を推進するようになる。それにより、フロイトに後継者とまで評価されるようになるが、間もなく意見が食い違い、別の人生を歩むことになる。フロイトの「精神分析」に対して、ユングは「分析心理学」と名乗った。フロイトの深層心理学を受け継ぎ発展させているが、フロイトとユングは見ている無意識の層が違ったと言える。フロイトから見るとユングは深掘りし過ぎ、やり過ぎと思っただろう。しかし、ユングはもともと深層に生きてきたので止めるわけにはいかなかった。また、一番の相違点はフロイトの性学説といわれるもので、フロイトはノイローゼの原因をすべて性に求めた。フロイトは無意識について性衝動の源と考えていた。ユングはそれを認めなかった。

私の考えでは、フロイトは人間関係の非常に強い情緒的結びつきを「性」と呼んでいる。精神分析とは「無意識」仮説と「人間関係」を2本柱と考えることができるので、それであればフロイトの言い分も納得できる。したがって、フロイトとユングはそこまで喧嘩をしなくてもよかったのではと考えている。

⑤ 『赤の書』

フロイトと別れた後、ユングは精神的に大混乱し、そのときの自分の体験を『黒の書』、『赤の書』と呼ばれるもの書いている。この本は門外不出だった。『赤の書』の方はようやく解禁され2010年に翻訳されたが、まだ十分に公開されていない部分が多い。

『赤の書』は分厚い本で、ユングが描いた見事な絵も掲載されている。読むのはなかなか大変が、絵だけを見てもおもしろい。冒頭には「私の全生涯とは、この時期に無意識から突然現れて、わけの分からない大きな流れのように私を圧倒し、今にも破壊してしまいそうだったことを、徹底的に検討し直すことであった。それは、ただ一人の人生のためにだけある以上の素材であり題材であった。その後のことはすべて、外的な分類、学術上の改訂、そして人生に統合することに過ぎなかった。だが、すべてを含むヌミノースな始まりは、この時

期であった」という言葉が記されている。この自己分析からユング独自の心理学が生まれたといえよう。

⑥ 塔の建設

ユング研究所はチューリッヒ湖畔のキュッスナハトにあるが、ユングは1922年、47歳のときにチューリッヒ湖北部のボーリングゲンに土地を買い、自分の手で塔を建て始め、徐々に増築し75歳の誕生日に完成させた。

私も訪ねたことがあるが、塔は湖のすぐ水際に建っており、見学は外だけで石の塔の内部は許されなかった。塔の全貌は陸地からは見えず、見るなら舟で湖面から眺めるしかないだろう（図9a）。

多くの人は家族や友人と過ごすための別荘のイメージを思い浮かべるだろうが、まったく違う。ユングにとって家族や友人とは、はるか昔の先祖の魂や古代からの錬金術師たちであった。普遍的無意識を生きるということはそのようなことである。しかし、現実の家族をおろそかにしたことはない。

ユングは塔を建てる動機について次のように述べている。『赤の書』など自己分析をもと



（図9a）ユングが建設した塔（撮影：森谷寛之 2002）



（図9b）ユングが塔の石に刻んだ絵（撮影：森谷寛之）

に研究を続け、無意識内容を確実な基礎の上に立てることができるようになった。しかし、「言葉や論文では十分ではない。…自分の内奥の想い、知識を、石に表現しなければならぬ。…私自身のために立てた家屋」である。つまり自分自身の人格そのものが石の塔であった。水道も電気もない。井戸、ランプ、薪の生活。ひとり籠もって瞑想、霊的集中し、ヴィジョンを見たり、壁に絵を描いたり、石に錬金術師の絵や言葉を刻んだ。「私は静寂にとりかこまれて『自然とおだやかな調和』のなかで生活した」、「そこで、私は第二の人格を生き、絶えず去来する人生を、あらゆる角度から眺める」と述べている。

ここで最初の夢を思い出してほしい。最初の夢ではユングは「地下の世界」にいた。地下茎のように生きてきた。それが段々地上に出て最後は大空に向かう石作りの水辺の塔になった。この石の塔は最初の夢を地上に現実化したものといえよう。

⑦ 晩年

1944年、69歳のとき、ユングは心筋梗塞と骨折、意識喪失しせん妄状態となる。このとき強烈なヴィジョンを見る。「宇宙の高みからはるか下に地球を見て、そのすばらしい光景に見とれる。…宇宙空間に浮遊しているユングを主治医が連れ戻す」という長い内容である。

ユングは回復し、代わりに主治医が亡くなるというエピソードがある。

ユングの一生は地下室の夢から出発し、ついに宇宙空間にまで至ったということであろうか。1961年、86歳、短い病気ののち、自宅で一生を終えている。

他方、フロイトはユダヤ人であるが故に、ナチスに本を焼かれ、癌をかかえながら、家族を守るために1938年イギリスに亡命し、1939年、第2次世界大戦の開始と同じ9月にロンドンで癌の激痛の中83歳で亡くなった。

IV ユングのタイプ論

① 心の羅針盤

ユングで一番有名なのは「タイプ論」である。内向性と外向性という言葉は日常語になっている。外の世界よりも自分自身のことが気になるタイプを内向性と呼び、自分の内的な世界よりも外界に関心が向く傾向のある人を外向性と呼ぶ。関心の向き方が違うので、見ている世界が違う。そのために意見が合わなくなる。このことから家族でも職場でも意見対立が生じる。たとえば、家族でも日曜日こそゆっくり自分の時間を過ごしたいと内向性の人は考える。しかし、外向的な人は日曜日こそ流行の場所へ行きたいと考える。意見が合わず喧嘩にまで発展し、せっかくの日曜日が台無しになってしまう。

かつて精神分析の活動が始まった頃、同じ仲間であったフロイトとアドラーの間で意見が合わなくなり、喧嘩別れになってしまったことがあった。アドラーは「劣等感コンプレックス」の提唱者としてよく知られている。二人はなぜ別れることになったのか、ユングがタイプ論を考え出したのはそのことがきっかけと言われている。つまり同じことがらでもタイプの違いによって見る方向が違い、そのために本来しなくてもよい争いをしてしまったというのがユングの意見である。

フロイト自身の性格は内向性である。しかし、そのノイローゼの理論はエディプス・コンプレックスのように患者と周りの人間関係、たとえば自分と母親との人間関係が原因と見る。つまりこれは外向的な見方。対して、アドラーはもともと社会的で性格は外向性であった。しかしアドラーの理論ではその逆で、ノイローゼの原因は患者自身の劣等感コンプレックスだと考える。すなわち、患者本人の内面に原因を求めた。つまり内向的な見方。それでフロイトとアドラーは折り合いがつかなくなり、袂を分かつことになった。同じことでも外から見た場合と内から見た場合では異なるので、それで対立しているだけである。そのことの自覚があれば、争うことはなかった。ユング自身は、先にも述べたように地下茎で生きている人であるから当然内向性で、心をより深く追求しようとしたので、その理論も内向的であった。フロイトとユングは、理論が外向的と内向的の違いにあるといえよう。

このようにタイプの違いで混乱が起こることを理解していたならば、不必要な争いを避けることができる。ユングはタイプ論を「心の羅針盤」と考えていた。また心理師(士)はいろいろなタイプのクライアントに会うことになる。そのとき、自分自身の性格傾向、つまり

タイプによってものの見方に特有のバイアスが生じる。そのことをしっかりと自覚しなければならない。これは職場での人間関係でも当てはまる。

タイプの違う人同士がいつも対立するとは限らず、お互いに違う見方をするので、なぜか不思議に引き合う。違う見方のためにお互いに世界が広がると歓迎されることもある。互いにない部分を補い合うことでより広い見方を獲得できることをユングは「相補性の原理」と呼んでいる。ユングの重要な理論的支柱である。

ユングがタイプ論で一番言いたいことは、自己中心的な一面的な見方からいかに脱するかを考えることである。自己中心性から見ると必ず対立が生まれる。それを超えて自分とは違う立場をも尊重する。つまり外向性の人が無意識は内向性で、内向性の人が無意識は外向性である。それぞれ自分の無意識となっている未開発の人格部分を自覚し、それを発展させ洗練させることによってより豊かな人格形成が実現できる。ここでもキーとなるのは「無意識」仮説である。

② 晩餐会をめぐる8つのタイプ

ユングのタイプ論として内向性－外向性の対比はよく知られているが、これ以外にも思考－感情、感覚－直観という対立軸を考えている。それに内向－外向の軸を合わせて8つのタイプ分類ができる（図10：この図は河合隼雄が『ユング心理学入門』で作った図である。他と比較しても完成度が高く、河合の数学的教養が生かされている）。

最後に、ユングのタイプ論を説明するおもしろい例を紹介したい。8つのタイプの人がある晩餐会を催すという、アニア・テイヤールという人が考え出した物語である。（エレンベルガー『無意識の発見(下)』（1970）p.337）

招いたのは、愛嬌があり、誰にでも好かれる完璧なホステス役の主婦「外向的感情型」である。その夫は逆に「内向的感覚型」のひっそりとした紳士で、美術品の収集家、古代美術の権威者である。

「現代」美術ではなく、「古代」美術に内向的傾向を示唆している。晩餐会を主催するのは外向的な人が得意である。「外向的感情型」と「内向的感覚型」が夫婦になって互いにないものを補い合い上手くいっている。細々した実務的な手順は「感覚型」が得意。

最初に来た客は、才能あふれる弁護士「外向的思考型」である。次に来る客は有名な実業家「外向的感覚型」である。実業家は「外向的」で社会の方に関心があり、さらに「感覚型」

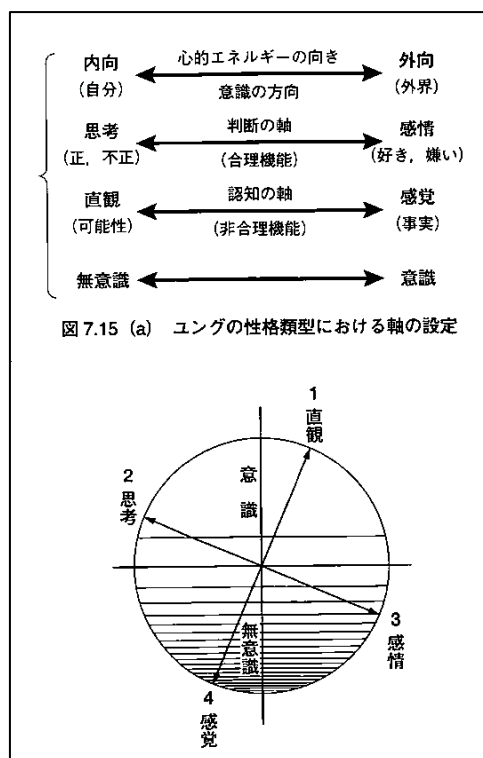


図 7.15 (a) ユングの性格類型における軸の設定

(図 10) ユングのタイプ論—心の羅針盤—における河合隼雄の説明モデル／『ユング心理学入門』（1967）培風館

で細かいデータを扱う能力がある。その夫人は、無口で謎めいた音楽家で「内向的感情型」である。「外向的感情型」と「内向的感情型」がペアになって補い合っている。到着順番もタイプと関係している。内向型は出不精で、そのために遅れているという意味がある。一方、弁護士は奥さん同伴ではなく一人で参加しているので、その分早く参加できた、と解釈できる。

次の客は、独創的な傑出した学者「内向的思考型」である。夫人は「外向的感情型」だが、彼は夫人を同伴しなかった。「外向的」な人は流行に敏感で他の人と合わせようとする。そのため多くの人と同じ似たようなアイデアを出す、「内向的」な人は他の人と合わせようとしないので、評判も気にしない。そのため独創的となる、しかも「思考型」であるので独創的な学者がふさわしい。しかしこの夫婦は「内向的思考型」と「外向的感情型」という全く反対のタイプなので、互いに“無意識的”には強く惹かれるところはあるが、“意識的”には共通するものがない。そのため上手くいかない。夫人と一緒に行動できないことを暗示している。もう一つは、夫人の「外向的感情型」はこの会のホステスと同じタイプなので、上手くいくこともあるが、同じタイプで競い合い、気に入らなかったから同伴しなかったのかも知れない。

その次に来たのは、鋭いアイデアの持ち主の技術者「外向的直観型」である。外向的技術者は外界に関心を持つ。データをこつこつ積み重ねるタイプ（「感覚型」）ではなく、突然データとは無関係にひらめく。直観型の人は現実からは遠いので時間感覚にも乏しいことを意味している。

最後の客は来ない。彼は神秘的な詩人「内向的直観型」。このタイプの人は外的な現実から遠い生き方をしている。そのために招待されたこと（外的事実）を忘れていたのである。

このようにそれぞれのタイプが、どのような人と上手くいって、どういう人と上手くいかないかということを比喩として表しているのです、大変おもしろいと思う。

皆さんも自分のタイプと夫婦、さらに子どもたちのタイプがどのような関係になっているか、考えてみてほしい。ユングの言いたいことは、どのタイプがよいというわけではなく、それぞれに個性があり、別のタイプは自分の無意識的側面である。そしてそれぞれが相補的で補い合う関係になる。無意識的側面を自覚することによって、自己中心性の一面的な考えからより全体的人格形成に向けて成長することが大事だということである。その考え方を広げると全体性の象徴であるマンダラに行き着く（図 11 本文 p.34 に掲載）。タイプ論の図はよく見るとマンダラ構造になっているの気づかれるだろう。河合は、ユングがかつて聴衆に向かって、「ここの居られる皆さんが、私の自己です」と述べたエピソードを伝えている（河合 1994 序説 現代人の宗教性 河合隼雄著作集 11 岩波書店 p.xii）。これは言い換えれば、「私はすべてのタイプを心の内に含んでいる」という意味になる。

このように、いろいろとおもしろい現象があるので、時間があればまた話したいと思うが、今はここまでとしたい。

質疑応答

- Q1 身体的症状と心理学はどう関係するのか
- Q2 対照的な概念を構造的に理解することは可能か
- Q3 ユングは夢分析で普遍的無意識を重視したか
- Q4 夢分析にはどのような効用があるのか
- Q5 解剖等、近代科学の発達はキリスト教の禁忌からの解放か
- Q6 夢にも成長・発達や老化はあるのか
- Q7 社会心理学は個人の心理とどのような関係を持って研究されているのか
- Q8 今もアスコナでユング学派の集まりが行われているのか

<補足説明>

- 影（シャドー）の概念
- グレート・マザーの構造
- マンダラ
- 「意識」のはたらき—確定性と方向性
- サーチャイト・モデル—意識と無意識の関係

Q1 身体的症状と心理学はどう関係するのか

腰痛と脳神経科学との関連が問われているが、フロイトの無意識との関係はどうか。

(森谷)

身体的症状と心理学がどう関係するかという質問。フロイトの精神分析を発見するきっかけはヒステリーの身体症状の研究からであった。ヒステリーは器質的には異常がなく正常であるのに、口が聞けなかったり、目が見えなかったり、耳が聞こえなかったりという不思議な身体症状を示す。そのような身体症状を暗示によって、つまり心理的方法によって作り出すことができるというのがシャルコーの発見である。それでフロイトは無意識のエネルギーは心と体とつながっていると考えた。身体症状とは、もともとは心に使うべき無意識のエネルギーが、心の中にある障害のために堰き止められて（抑圧）身体の方に逆流したために生じた。フロイトはそれをエネルギー「備給」と呼んでいる。ヒステリーを治すということは、身体に備給されたエネルギーをもとの心へ戻すことを意味した。つまり自由連想でいろいろなできごとを話しているうちに「抑圧」がとれて、身体症状を作り出していた無意識のエネルギーが心の中へと回復し、そのエネルギーを本来の心に使うことができる。大雑把にいうと以上のようなことになる。

しかし、質問にあった腰痛などは別に考えなければならない。多くの身体症状一般はヒステリーモデルだけではうまく説明できない。現在では身体的な症状に対しては身体的なケアが必要なので、まず医師に診てもらわなければならない。神経や骨に異常があるかも知れない。

その一方で医学的に何も異常がない場合も多い。その場合、“ひょっとすると”心理的な面からのかかわりが有効ではないかと医師は考える。そこで医師から心理師(士)に refer される。

そこで、心理師(士)は何をするかという「あなたはこれについて何か思い当たることがありますか?」と質問する。この質問は「無意識仮説」が前提されないとできない。患者はそれに対して腰痛などとはまったく関係のないようなことを言い出すことが多い。

この部分は基本的にフロイトの自由連想法が適用されている。心理師(士)はフロイトと同じ立場に立ち、腰痛のことに限定しないでその話の流れるままに聴き続けることになる。患者は腰痛のことで相談に来たはずなのに、それとはまったく関係のない職場でのことや家族との悩みに流れていく。患者は、最初相談に訪れたときには話す予定ではなかったことを口に出してしまう。はじめは予定していない話、つまり無意識的な内容を自然に口にする。心理師(士)は話を聞きながら、腰痛はストレス(圧力)と関係しているのではないかと考えてはいる。こうして話をしているうちに腰痛が軽くなるということがある。心理師(士)としては腰痛自体を治そうとは考えていない。「腰痛という症状をきっかけ」に悩みができ、その相談を受けている。

もし、器質障害であれば心理相談で治ることはない。しかし、腰痛があるためにそれに付随して生じる周囲との葛藤、これは対人関係にまつわる問題については心理相談の対象になる。ストレスがあるために腰痛になるという因果関係か、腰痛をきっかけに周囲とストレスが生じるのかははっきりしない。心理師(士)としてはどちらでもよいと考えている。

Q2 対照的な概念を構造的に理解することは可能か

グレート・マザーとグレート・ファーザー、アニマ(anima)とアニムス(animus)に限らず、対照的な概念を内向←→外向のように構造的に理解することは可能か。

(森谷)

解剖学がなかったとき、杉田玄白は「神経」など新しい言葉を作らなければならなかった。明治維新でそれまでになかった西洋の概念を日本語にする必要に迫られたことを思い出していただきたい。それと同じようにフロイトが精神分析を始めたとき、そこで見出した新しい現象に対して言葉を与える必要に迫られた。そこでフロイトはいろいろなジャンルから言葉を借りて新しい意味づけをしてきた。とくに物理の力学から抑圧、抵抗、エネルギーなどの言葉を借りてきた。物理とは真逆の神話からもエディプス・コンプレックスなどの言葉を借りてきた。とにかく使えるものは何でも使わなければしかなかった。何もなければ考えることもできない。とりあえずそこから出発して、後からゆっくり考えようということだと思ふ。

心の現象はとらえどころがないので、何か量を測る拠り所となるモノサシが必要になる。そこで苦肉の策として対概念で考えるようになったと思う。

フロイト、とくにユングは対概念で考えることが多い。意識－無意識、内向－外向、思考－感情、感覚－直観、父性－母性、ペルソナ－影、男(アニムス)－女(アニマ)など。

先のタイプ論の図 10 (本文 p.24 に掲載) も対概念で考えている。ここではデカルトの解析幾何学の縦軸・横軸を対概念に利用している。高いー低い、楽しいー悲しいなどの形容詞対が心理学では測定するために広く用いられている。

この対概念を解析幾何学とともに、ベクトルで視覚的に表わすことを私は提唱している。解析幾何学とベクトルは相性もよい。高校の数学で教えられている。心理学は数学でも使えるものはすべて使う。

ベクトルは高校の力学では必ず使っている。「向き」と「大きさ」の両方を表現できるとも便利な数学である。心理学は「定性的」に考えるだけではなく、なんとか「定量的」にも考えようとしている。「心の動き」を心のエネルギーの「向きと大きさ」として捉えることができる。それはベクトルがぴったりである。しかし、ベクトルはニュートンの時代にも、またフロイトの時代にもなかった。このベクトルを使うことにより先に述べた「不登校の心の動き」を表現することができるようになった。「父親に惹かれる、母親に惹かれる」、あるいは「反発する」等、それはある種の力学関係で表現できると思う。

アニマ(anima)とアニムス(animus)はユング特有の術語で、男性の心の中の女性像をアニマと呼び、逆に女性の心の中の男性像をアニムスと呼んでいる。「男性」・「女性」と区別するのは、先にも述べたように「物理的現実」と「心的現実」を区別するためである。アニマ、アニムスというのは心的現実を指している。端的にいうと男性が見た夢に出てきた女性をアニマと考える。また、その逆がアニムス。つまり現実の男女と、夢の中の男女を区別している。内向性のユングから見た場合、現実の男性、女性というよりも心の中のイメージを重視する見方である。一般にはなかなか理解しにくいと思う。「あなたの好みの異性はどういうタイプですか？」と質問されて、思い浮かべるイメージというと分かるかも知れない。

ユングが「お母さん」というとき、現実の母だけを指しているわけではない。夢の中に登場するときの「母」は現実の母とは違う。「現実の母」と「夢の母」とが違う場合がしばしば起こる。日常ではやさしい母が夢では「恐ろしい母」として出てくることがある。この場合、どちらの母親を重視するか。普通は夢の母を無視する。しかし、夢の中の母の方がより本人の心に影響を与えているとして、夢の中の母をより注目するという方向もあり得る。それを「母」と「母イメージ」と呼んで区別する。

しかし、実際の夢分析の場面では、ユングの夢分析の基本的な考え方のように「夢のお母さんについてどう思うか」「それから何を連想するか」等々の対話をしながら進めていく。

Q3 ユングは夢分析で普遍的無意識を重視したか

フロイトもユングも夢を重視したが、ユングの夢の理解について、普遍的無意識を重視しているのではないか。

(森谷)

フロイトが夢の重要性に気づき、近代の夢分析を始めたが、夢よりも自由連想法の方を基本にした。それに対してユングはフロイト以上に夢を重視した。ユングの理論はすべて夢を

前提にしている。夢は各個人でまったく違うが、経験を積んでいくと共通のパターンがあることに気づいていく。文化の違いを越えて、全世界に共通の形があると気づく。先に述べたユングの職業選択の夢の「深い森の中の墓地のある丘を掘り始める。先史時代の動物の骨を掘り当て、興味を持つ」にも深い森、地下、永遠の時間にユングの心が惹かれている。その後、多くの人の夢を分析する経験を積み重ねることによって、普遍的要素を元型として取り出した。思弁ではなく経験的に導き出したものである。

Q4 夢分析にはどのような効用があるのか

夢分析の効用、役に立つ夢分析の具体例を知りたい。

(森谷)

とてもよい質問でありがたい。

フロイトは「夢は無意識への王道」と呼んでいる。私は大学院生の頃からすべての心理相談で夢を聞くようにしてきた。もちろん夢を見ない人も多い。その経験でいうと夢分析は本当に役に立つと思っている。心理師(士)の中には夢分析をしない人もいるが、しなければ大事なことを見落とし、損をすると思う。

まさに“具体例”としてユングの『自伝』の夢を紹介したつもりである。ユングの生活史についてあれこれ説明するよりも、夢の方がはるかにユングの具体的な姿をぴったりと捉えている。夢以上にふさわしいものはない。またこれは公開された夢であるし、当人はすでに亡くなっているのです。このようなおおよげの場でも気兼ねなく語り合うことができる。

しかし、問題はいくら具体例を挙げたとしても、聞く側はピンとこないものである。それこそが夢を紹介するときのむずかしさである。

そもそも夢の具体例とは何かという大きな問題がある。誰の夢を出せば具体例になるのか。ユング以外の誰の例を出しても、聞く側は他人の夢に過ぎない。ピンとこない。そうすると具体的なものは、自分自身の夢ということになる。自分自身の夢ならば、それと向き合い、自分でその効用を確認することができる。それぞれが自分で効用を確かめるのが最良であろう。しかし、それは公開したくない、できないというジレンマがある。その代わりに自分で夢日記をつけて、自分で確かめることができる。

公開の場では具体的ではなく抽象化して語るしかない。たとえば、鬱症状で苦しむ人の場合、「どのように苦しいのか」と聞いても、なかなか答えられない。「夢をみるか」と聞くと「夢をみる」と答える人が多い。夢の中の方が、鬱状態がどのように苦しいのかがよく分かることが多い。たとえば、追われている、圧迫されている等、ストレス状況を指し示すような夢が出てくる。そして重要なことは、夢の中では誰も助けてくれないという特徴があることである。それはその人がまさに置かれている状況を反映している。一人で誰にも知られずに苦しんでいる。その状況を反映している夢を語ることで、聞いてくれて状況の苦しさを分かる人(セラピスト)がいると一瞬でも圧迫感から逃れることができる。

また夢はたった一つではなく、継続して報告されるので、次の夢で少しストレス状況が変

化している。心がどのように変化していくのか、その移り変わりの様子を夢を通じて知ることができる。同じ追われる夢でも、苦しさの内容や度合いが夢に示される。また、一人で逃げていたのに、他の見知らぬ人が登場するなどの変化が現れる。夢内容によってどの程度良くなり、悪くなっているのかも分かる。

Q5 解剖等、近代科学の発達はキリスト教の禁忌からの解放か

解剖の禁忌はキリスト教下における認識だったとすると、近代医学、あるいは心理学に至るすべての近代科学はキリスト教の禁忌からの解放ではないか。

(森谷)

ガリレオの発見も、キリスト教、あるいは古代アリストテレスの哲学の影響からの解放という意味があるが、解剖はキリスト教文化だけではなく、広く人類のタブーだったと思う。日本でも長く禁止されていて、西洋の影響を受けて江戸時代になってようやく始まった。それまで日本でもタブーだった。日本で最初に解剖が始まったのは京都だと言われている。杉田玄白らによって『解体新書』が翻訳され、そこから発展した。エジプトはミイラを作っているので、解剖が行われていたわけだが、ミイラを作るのと、近代の解剖学とは発想が違う。そのエジプトでも、解剖する人は罪を犯していると見なされて、ミイラを作った人は後で咎を受けたようである。ただし、刑罰を受けたわけではなく、形式的に石などが投げられ、その後許される儀式があったと、解剖学の本を読んで知った。古代ローマの医師のガレノスも動物の解剖をしていたと聞いている。専門家ではないので、それ以上詳しい事情は知らない。むしろ世界中でキリスト教文化の中で解剖が最初に始まったと言えるのではないか。

多くの人は解剖を情動的に拒否するのではないか。キリスト教の影響からの解放と言うよりも、見たくないものを敢えて見るには勇気がいる。その勇気によって新しい展望が開けた。もちろん、その勇気的前提として社会の規範から自由になる必要があると思う。

見たくないものを見るのは人格の成熟がなければできない。したがって、科学の発達の歴史は人間の成熟のプロセスと考えてよいのではないか。我々が学問を学ぶときは、まず読み・書き・ソロバンを学ぶ。できるだけ早期に、たとえば小学生に深層心理学を教えた方がよいとはあまり考えられていない。つまり、自我の発達、精神的な成熟がなければ教えられる科目だと思う。私も 20 代半ばになってから学ぼうと思うようになった。それまではそのような気にならなかった。

Q6 夢にも成長・発達や老化はあるのか

ユングが自伝を出したのは 86 歳前頃だと思うが、その頃に少年時の夢を客観的に描いていることに驚いた。ただ、それは少年のときにインスピレーションがあった夢と同一なのか。夢自体に肉体や年齢とは離れた成長・発達、あるいは老化というものはあるのか。

(森谷)

ユングの『自伝』作成の発端は 1956 年夏のエラノス会議の場で出版依頼があったからで、

当時 80 歳を超えていた。当然、最初ユングは自分の内面を出すことを嫌がったという。幼年・学童・学生時代の 3 章を書いたのは 1958 年で 83 歳のときであった。遺志によって死後の 1962 年に発行されている。翻訳は 1972 年である。

私も『ユング自伝』を読んだときに、ユングが幼児期の夢を記憶していることに驚いた。本日、紹介したのはその一部で、自伝にはたくさんの夢がある。これほど鮮明に覚えているのかと不思議に思った。

しかし、私たちでも幼稚園時代、小学校時代の遠足や運動会、親や友だちとの思い出などはかなり覚えているものである。当然それらはすべて外的生活の出来事である。しかし、ユングのように「地下茎のような生活」をしてきたきわめて内向的な人は、それらは夢として体験され記憶されている。地上の生活よりも地下世界の生活の方がありありと記憶されていることはあり得ると、現在は考えている。

改めて『自伝』を読むと、「私の人生はすべて『外的な』面は偶発的なものだった。内的なことだけが、実体性をもち、決定的な価値をそなえていることがわかった」と述べている。（『自伝 1』 p.8）つまりユングは私たちの多くが体験する世界と逆転している。

夢は次々に見るもので、その年代にふさわしい夢が出てくる。青年期には青年の発達課題に合わせた夢が出てくるし、老人には老いの課題が出てくる。夢の中の時間はとても大事な注目点である。相談に来た青年が繰り返し、幼児期の夢を見ることがある。その青年にとっては心の中は幼児のままと考えることができる。すると心理療法の目的は幼児のような心から青年にふさわしい心へと如何に成長を遂げるかという課題と分かる。

『ユング自伝』では幼児から老年期までの夢がすべて掲載されているので、そのテーマの変化が分かるだろう。

Q7 社会心理学は個人の心理とどのような関係を持って研究されているのか

臨床心理学、深層心理学は個人の心理という観点だと思うが、人間が社会的な動物であるという意味で、社会心理学は心理学の中でどのような形で出てきて、どのように個人の心境的なものに関わりを持って研究されているのか。

（森谷）

社会心理学は「人間がその場の状況や他の人々（社会）とのかかわりの中で、どのように影響を受けて行動するのか」という視点から人間を研究する学問と定義される。

こういう質問の際に、先ほどの心の羅針盤を使うことができる。羅針盤のタイプ論で言えば、自分と社会との相互作用に着目する社会心理学は「外向性の学問」ということができるだろう。他方、深層心理学は個人の内面を基礎に置く「内向性の学問」でちょうど逆方向に位置づけられる。そういう意味で相容れない。普通は対立的関係にあり、互いに理解し合うことがむずかしい。しかし、それこそが相補的な関係にあると考え直すことができる。

心理師(士)は、不登校・いじめ・自殺などを訴える人との面接を通して社会状況を鋭く観察している。社会心理学者よりもはるかに社会状況のなかに身を置いている。

個の中に普遍性を見るのはとくにフロイトやユングの深層心理学の特徴といえる。フロイトもユングも個人の内面を深く掘り下げていくと、そこに社会現象も映し出されている。個に映し出された宗教や戦争、思想などを根拠にして広く社会的現象を論じている。精神分析家のエーリヒ・フロムは第2次世界大戦のヒットラーの独裁をなぜ多くの人が歓迎したのかについて、『自由からの逃走』という視点で論じたりしている。

身近なところでは精神分析医の土居健郎が「甘え」の個別事例観察をもとに、それを普遍化し日本人特有の心理的傾向として広く日本人論としてミリオンセラーになった。

河合隼雄も個人の分析体験を通して「日本は母性的な国、対して西欧は父性的な世界観が支配し、そういう原理で行動している」と提案している。

いじめの被害者と加害者の関係を扱った経験から、国と国とのレベルの紛争問題を心理学として論じられることも行われている。相手の国民に対してのネガティブな感情を持つことは「無意識内容を相手に投影」という概念で考えると理解できることが多い。

Q8 今もアスコナでユング学派の集まりが行われているのか

スイスのアスコナはユング学派の本拠地だと聞いたが、今でもアスコナでユング学派の定期的な集まりがあるのか。

(森谷)

少し誤解がある。ユング派の本拠地はスイスのチューリヒ湖畔のキュッスナハトで、そこにユング研究所があり、分析家の養成訓練がなされている。一般にも開かれた講義や研修会が開催されて、広く世界中から集まっている。質問はエラノス会議のことを指している。

エラノス会議とは、ユングが1933年に始めて、ユングの死後も1988年まで、スイス南部のマジョーレ湖畔にある保養地アスコナで毎夏に開催されてきた。ユング学派の集まりとか一般の人が参加するというような性格のものではなく、東西の著名な思想家が自由な発想で学术交流を深める場であった。西洋と東洋が相互に語り合い、新しい文明を作ろうというような壮大な試みで、ちょうど新しい文明を模索する「ゲーテの会」と理念が通じ合うように思う。ユングはゲーテと血がつながっているという神話もあるぐらいなので、何か深い縁があるのではないだろうか。

日本からは鈴木大拙、井筒俊彦、上田閑照が参加している。河合隼雄も招かれて1983年から1988年まで、次の5回の講義をしている。

「相互浸透—中世日本における夢」、「明恵夢記における身体」、「日本神話」、「日本の昔話」、「とりかえばや—性役割交換の物語」。

お分かりのように、河合は異文化を超えて話し合う共通言語として「夢」や「神話」を駆使している。夢や神話を素材にすると、文明全体を語るができるという信念は河合が長年夢分析を続けてきたからである。その講義録はご子息俊雄氏によって翻訳出版されている。(河合隼雄著・河合俊雄訳 2022 夢・神話・物語と日本人—エラノス会議講演録 岩波書店)

<補足説明>

(森谷)

●影（シャドー）の概念

ユングの提唱した概念のひとつでペルソナ（仮面）と対になる概念である。ペルソナが生きていくための世間に見せる人格を表すのに対して、それとは逆の反社会的な人格的側面を指している。表に出て光の当たる人格に対して、その影のような側面を指している。『ジキル博士とハイド氏』の関係など、二重人格の心理として説明される。ゲーテの『ファウスト』のメフィストフェレスはファウストの「影」と理解することもできる。

普通世間では、ファウストとメフィストフェレスの二人は別の人間、別人格として捉える。しかし、「影」という概念は他人ではなく、自分自身の中の存在の一部とみなす見方になる。ファウストにとってメフィストテレスは自分自身の心の中の未解決の課題となる。ファウスト自身の課題（影）である。また、このファウストの課題は他人ごとではなく普遍的で、私たち自身の課題でもある。

●グレート・マザーの構造

ユングの見方は独特で一般には理解しにくい面がある。Q2の「アニマ」などでも述べたことに通じる。

たとえば、子どもに「母の日」に先生が「お母さんの絵を描きましょう」と提案する。そのとき、多くの子どもはいつも見なれている母親の写生を描くであろう。それを見せてもらったお母さんは「よく似ている。ありがとう」と答えるだろう。しかし、もう一つのやり方は「目をつむってお母さんを思い出して下さい。そして心に思い浮かぶお母さんの絵を描いて下さい」と教示する。そうすると写生したお母さんとはまったく違う絵ができることが多い。「心の中のお母さん」が絵になる。以前に「まぶたの母」という言葉が流行ったことがある。二つを区別するために後者を「お母さんイメージ」と呼ぶ。

現実には二つあり物理的現実と心的現実と先に述べた。ユング心理学が問題にするのは心的現実である「お母さんイメージ」を指している。心理相談では、子どもにとって母親がどのようなイメージとして心の中に存在しているのか、それが重要であると考えている。母親側からするといつも子どもを可愛がっているつもりでも、子どもはそう受け取らないということがある。物理的現実では同じ母親でも、心的現実の母親イメージにおいては兄弟姉妹でそれぞれかなり違う。母親は、子どもの心に映る母親のイメージはコントロールできない。どうして同じ親なのに子どもの受ける印象がこうも違うのか。

このようにして母親のイメージを追究するとマリヤや観音などのイメージや、また逆に子どもにしがみつき、呑み込む恐ろしい魔女、さらに動植物などのイメージとなる。それらを全体として母親元型、グレート・マザー（太母）と名付けている。

●マンダラ

日本では東寺の「胎蔵界マンダラ」と「金剛界マンダラ」がよく知られている。一度は見たことがあるはずであるが、その意味を考えたりしないと思う。

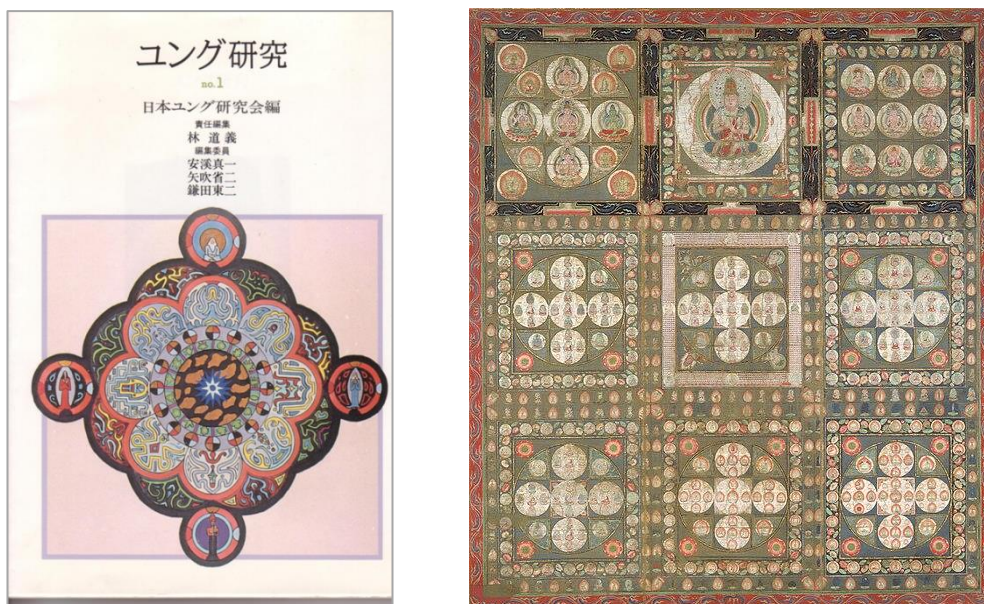
ユングがフロイトと別れて精神的混乱状態になったとき、ユングは混乱から抜け出そうと「無意識と対決」した。そのとき、自己を取り戻すために描画などの芸術を利用していった。その頃の体験は『赤の書』に絵としてたくさん掲載されている。

フロイトとユングの違いの一つは、フロイトが言葉を非常に重視したので、フロイト派の本には絵や図はほとんどない。日本の「精神分析研究」誌は今でも文字ばかり。ユングやユング派の本はビジュアルでとても楽しく読める。そのためにフロイト派からはマンダラには興味を持たれなかった。

ユングは精神的混乱が治まる頃の1912年に、はじめて円、四角形などの幾何学模様の図形を描いた。そのときにはその意味は分からなかったが、後に東洋のマンダラと同じ意味を持つことを知る。ユングはマンダラを「自己（セルフ）」、すなわち「人格の全体性」を意味すると解釈した。

密教のマンダラも宇宙全体の仏が一枚の絵に収まるように九分割の入れ子構造に描かれている。私は1983年に金剛界曼荼羅の九分割の構造から描画法を思いつき、「九分割統合絵画法」と命名し、芸術療法に活用してきた。

心が混乱しているときに箱庭作品などを作ると、当然であるが、いかにも混乱した乱雑な状態の作品が作られる。しかし、精神的に落ち着きはじめると、それが整頓され、まとまった構造として表現される時期がくる。自分の精神状態と自分の部屋の片づけ具合を関係づけてもよい。



(図11) ユングが描いたマンダラと東寺の金剛界マンダラ
(左)『ユング研究 No.1』(1990)／編：日本ユング研究会、林道義／名著刊行会
(右) 国宝 両界曼荼羅図 金剛界曼荼羅 (平安時代)／真言宗総本山 東寺 (教王護国寺)
Public domain, via Wikimedia Commons

精神的混乱が治まるときの作品の形が、円や四角というような整然とした幾何学的構造になる。すなわち、マンダラ構造となる。西洋人のユングがマンダラを重要視したことで、日本では改めてマンダラが見直され、その価値が再発見されることとなった。

(心の) 秩序-無秩序という観点から考えると、私はそれを熱エネルギーの第2法則「エントロピーの法則」で説明できるのではないかと考えている。すなわち、マンダラは無秩序から秩序へと変わるときに出現する。マンダラ構造はエントロピーが最小、つまり秩序的である。例えるなら、高温ではランダムに活動していた水分子が温度の低下するにともない、水の結晶になる。マンダラはこの結晶構造に匹敵する、という比喩が使えるだろう。

●「意識」のはたらき-確定性と方向性

ユングは1916年に「超越機能」という論文を書き、意識と無意識の関係を論じた。「意識」は人類の歴史上で新しく獲得された特性であり、近代人は意識の働きによって科学的思考を作り出し、高度な文明を築いた。この意識の性格特徴をユングは「確定性と方向性」と指摘した。他方、未開人は意識の「確定性と方向性」が獲得されていないために、科学的思考が発達しなかった。

意識のおかげで文明が発達したが、そのことで失うことも多くなった、とユングは意識の弊害を指摘した。すなわち、「方向づけられる」とどうしても一面的になる、つまり心が狭くなり、精神的に不安定になる。近代人の精神的不安定さを克服するためにどうするべきか。それは意識の力を弱め、無意識との接触を回復することで視野を広げることが重要である。この意識と無意識の相互作用を「超越機能」と呼んだ。

抽象的でなかなか分かりにくいと思うので、先ほどの絵をもとに解説したい。

たとえば、天体観測をするガリレオは、望遠鏡で遠くの月をしっかりと見ようとしている。月を見るにはきちんと方向性を定めなければならない。目標に向かって意識を集中する。すなわち月観測には意識の確定性と方向性が必須である。そこから近代科学が生まれる。

望遠鏡が電子顕微鏡になるともっと細かい部分に意識を集中する。当然のことながら望遠鏡よりもさらに狭い範囲しか見ることができない。科学的思考が進むにつれて、無意識が拡大する。以前、「専門バカ」という言葉が叫ばれたことがある。目的志向性が強くなるほど意識と無意識が対立関係になり、意識と無意識の乖離が生じて心が不安定になる。近代人はこのために未開人よりも心が狭くなる。

意識と無意識の乖離を解消するためにはどうするか。瞑想する明恵(図4 本文 p.12 に掲載)は、目は半眼で何か特定のものを見ようとしていない。目は焦点を合わせず、ぼーっとしているが、はるかに全体が見えている。心は安定しているが、こういう態度からは近代科学は出てこない。

すなわち意識の力を弱めて(無くすのではない)、無意識を活性化させる。それにより意識と無意識が統合される。それが心理療法の原則である。

この方法は新たな創造へと向ける方法でもある。創造性の開発は、いかに意識の固定観念

から自由になるかにかかっている。固定観念から自由になり、今まで見えなかった（無意識）領域へと目を向けることで、何か新しい世界が意識に入る。

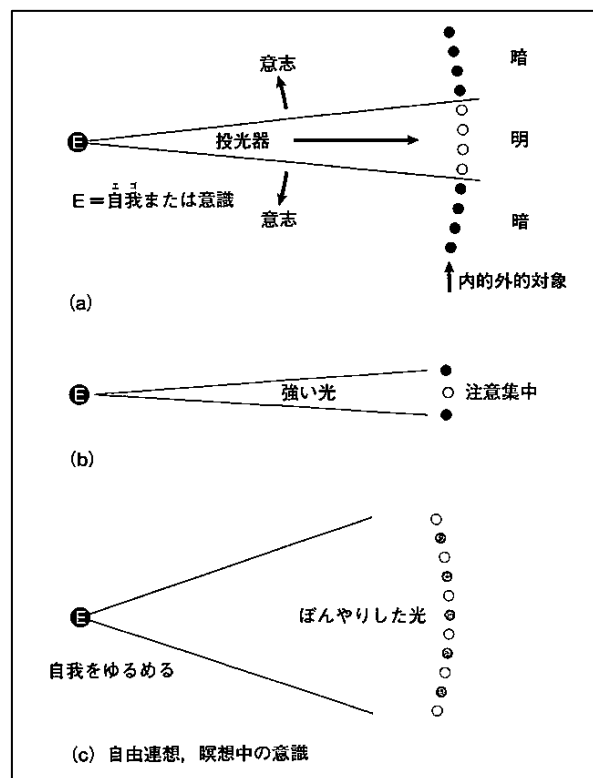
図 3c（本文 p.9 に掲載）の絵から分かるように患者もフロイトも意識を集中するのではなく、ぼんやりとしつつ何かに注意を向けている。フロイトはこの態度を「平等にただよわせる注意」と呼んでいる。日常生活では相手の目をしっかりと見て会話する。これが原則であるが、フロイトはそうしていない。患者もフロイトも瞑想状態に近い。特定のことに意識集中するのではなく、ぼんやりとして瞑想的ではあるが、同時にしっかりと注意を向けている。これは無意識へ対応する基本的態度でもある。

●サーチライト・モデル ー意識と無意識の関係

心理学は自然科学に倣ってモデルを使って考え説明しようとする。モデルは実在性を持たないけれど役立つ。よいモデルは単純であるが多くの観察を正確に説明でき、次の予測ができるなどのメリットがある。精神分析のモデルで有名なのは、先に説明したフロイトの「心的装置」で心を蒸気機関のように考えている。フロイトのモデルの他にも価値あるモデルがあると考える。

次に紹介したいのは「サーチライト・モデル」と私が呼んでいるものである。ユングの弟子である C.A.マイヤーが描いたものである。マイヤーはユング研究所初代所長で河合隼雄の教育分析家であった。マイヤーは「意識」を投光器（サーチライト）にたとえて、“意識と無意識の関係”を視覚的に描いている（図 11）。先のユングの「意識の確定性と方向性」のアイデアを絵で表すところではないかと思う。

「あるもの」を見るためには光を当てる必要がある。それを意識の働きになぞらえている。光を当てるとそこは見えるが、周りは見えなくなる。健康な人は、このサーチライトを自由に振り向けていろいろなことを探求できたり、光量を絞ったり緩めたりできる。これが柔軟な思考、態度につながり、未知の領域を探索できる。しかし、中にはサーチライトを動かせなくなって、同じところばかりしか光を当てることができない人がいる。ノイローゼというのはいわば自由度が失われた状態ということができる。不安が強いと怯え、周囲が見えなくなる。近代人は視野が狭くなるというユングの



(図 11) ユングの心の構造モデル（サーチライト・モデル）／マイヤー（1975）、(b) (c) は森谷による加筆

言葉はこのような状態を示していると言えよう。

それを解消するには、自我を緩めてサーチライトをいろいろな方向に自由に動かすことである。まずリラックスすることが大事。リラックスするとまわりがよく見えるようになる。こちらから「これはどうか」「あれはどうか」と質問をして、意識を柔軟にしていく。

瞑想状態は広い範囲にぼんやりと光を当てる方法と言えよう。

モデルのよいところは次の予測が考えられることである。マイヤーのサーチライト・モデルは単独であった。もし、これが2人になるとどうなるか。つまり2本のサーチライトを考える。それぞれに意識の方向性と狭さがある。お互いに自分の見たいところしか見ていないので、それを一致させるのはむずかしい。硬直したサーチライト同士では光が交差することがない。互いにねじれの位置にある二つのサーチライトでは、いつまでも同じものを見ることができない。

<参考文献>

- 森谷寛之 2000／『生徒指導と心の教育－入門編』 森谷寛之・田中雄三編 培風館
- 森谷寛之 2018／『臨床心理学への招待－無意識の理解から心の健康へ－』 梅本堯夫・大山正監修 新心理学ライブラリー12 サイエンス社
- 森谷寛之 2022／『「無意識」の歴史的現象学－科学史におけるフロイトのパラダイム・シフト』 京都文教大学臨床心理学部研究紀要 15, 67-84.
- 森谷寛之 2023／『「無意識」の歴史的現象学(2)：錬金術と近代化学－科学史におけるフロイトのパラダイム・シフト－』 京都文教大学臨床心理学部研究紀要 16, 49-67.

発行日	2024年5月31日
講演著者	森谷 寛之
編集発行	公益財団法人 国際高等研究所 <「新たな文明」の萌芽、探求を！>プロジェクト事務局
編集協力	アトリエ アロ 大仲佐代子

ISSN 2759-0577



満月に照らされて浮かぶ「ゲーテ」の胸像
(国際高等研究所庭園)